

1) 第1アウシュヴィッツ強制収容所

昼食の後は、バスで一時間揺られ、アウシュヴィッツ強制収容所へ向かった。強く降っていた雨もやみ、晴れかけた空の下、到着した私たちの目に飛び込んできたのは多くの見学者の姿だった。

今ここはポーランド国立博物館としてヨーロッパ中の若者たちが過去を学びに来るといふ。

日本人唯一の公認ガイドである中谷剛さんの声をイヤホンでしっかり聞き取りながら、私たちは第1アウシュヴィッツ強制収容所と第2アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所を回った。



Arbeit macht frei (働けば自由になる)



高圧電流の流れる鉄条網

まず、有名な「Arbeit macht frei」(働けば自由になる)の門をくぐる。

私たちは被収容者棟の一部にある展示スペースを回りながら、ここで過去に起こった事実を目の当たりにした。ここに来た人たちが持ってきた、靴、靴、メガネ、義足、そしてガス室に入れられる前に切られた女性の髪の毛。息を飲んだ。ただ見て回るのが精一杯だった。



ガイド(中田)さんからの説明を真剣に聞く



ガス室・焼却場

そして、他の囚人を救うために自ら死を選んだマクシミリアン・マリア・コルベ神父のいた地下牢や、「死の壁」と呼ばれる射殺場を通り、ガス室と焼却場の中にも入った。とても暗く、なんとも落胆を覚える空間に、みな言葉少なくなっていた。

2. 第2アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所

その後、私たちはビルケナウ収容所へと移動した。「死の門」と呼ばれる中央監視塔をくぐり、貨車を降りた人たちが「選別」を受けた場所に辿り着いたその瞬間。雲間から一筋の太陽の光が差し込んできた。ここに収容された人たちもこの夕日が体験価値となり生きる支えとなったのだろうか。私たちに対しても救いの光のようだった。

その後、中谷さんから فرانクルが選別を受けた場所も案内された。ここで、フランクルの運命が左右されたのかと思うと、単に運命というだけではなく感慨深いものを感じた。

第2収容所はより多くの人を収容するために、木造で作られ、すきま風もはいるような安普請であった。トイレも隣の柵もなく、ただ穴が空いているだけ。ストーブも各収容所に一つだけというひどいものであった。

2つの強制収容所のむごい事実を目の当たりにして、この事実がわれわれに「皆さんはこれからどう生きるのか」と問われているようであった。



中央監視塔

フランクルが選別を受けた場所



雲の間から一筋の光が・・・

